
あしざわTwitter小説集

葦沢カモメ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あしざわTwitter小説集

【Nコード】

N2012R

【作者名】

葦沢カモメ

【あらすじ】

140字で綴った物語、「Twitter小説」をまとめました。今年中に311作書くのが目標です。感想はいりません。ただ、どれか一つでも心に止まるついのべがあれば嬉しく思います。

第一卷 盲目タイマー

「会話」 隣の会話が耳に入る。「クレーム処理って大変でしょ？」
「確かにね。でも面白いこともあるよ。こないだなんか『いつもクレーム処理お疲れ様です』っていう人がいてさ。最後には『酷く怒鳴られた、って報告しといてくれればいいから』って。感動しちゃった」思わず足を組み直してしまった。

「Trick」 奴を眠らせ仕掛けにセット。玄関が開くと作動して、あたかも自分で首を吊ったようになる。完全犯罪は成った。あとは宅配便が来る時に仕事場にいればアリバイが成立し、自殺となる。心の中でガッツポーズを取った、その時だった。奴のよくしつけられた飼い猫が、玄関から出て来たのは。

「自転車」 ペダルを思い切り踏みつける。この風を斬る感覚が好きだ。でも通勤中のオジサンの鈍い自転車が、前を塞いでいる。道が細く、なかなか追い越せない。でも一瞬、隙ができた。もちろん速攻アクセル全開。車道側から回り込む。と、視界には白黒の車。甲高い笛の音が、早朝の空気を震わせた。

「昇降機」 エレベーターのドアが閉まる。独り溜息が漏れる。やりたいことをやるか？ それとも現実を見るか？ 親に面倒見させてこのザマじゃあ、バカ息子もいいところだ。そこでドアの注意書きが目に入る。「触れるな危険」……バカならバカをやり通さなきゃ、バカじゃねえよな。ドアは冷たかった。

「再還流」 道の向こうにボロ服の男がいる。「ああやってゴミ拾って生活してるのって、偉いのか、はしたないのか」「何言ってるんだ。集めてんのはさ、リサイクルできるゴミなんだぜ。それを集めてる奴はリサイクルされるに決まってるんだろ」朝刊の一面を見て、三年前のそんな何気ない会話を思い出した。

「泥棒」 あと少し……！ カチャ。侵入成功っ！ さて、今日の獲物は……「コラ！」ヤベツ！ 振り向くと、男が玄関に仁王立ちもうダメだ。「ちゃんとドア閉めとかないとバレるだろうが。それから、靴なんか脱いでないで金庫探せ」「あ、はい。すみません」へ？ だ、誰！？ てか、カッケえなあ。

「隣」 「どんな時でも待っていてくれてさ、落ち込む俺を励ましてくれる人が居てくれたらな」そうツイートして、携帯を閉じた。早くバスが来ないだろうか。夜に独りバス停に立つのが、すっかり日

課になった。特にこの季節はキーを打つ指先がかじかむ。そこでふと、街灯がちらついた。灯台もと暗し、か。

「兎」 「わゝ、赤い眼可愛い」 「これはアルビノって言って、生まれつき色素が無いんだ。だから血の色が透けて赤く見えるんだよ。言わば変わり者さ」 『誰が変わり者だって？ クソッ、このケージさえ無ければ！』 だが、女の何気ない呟きに考え直した。 「ふゝんでも兎は兎でしょ？」 # t w n o v e l

「タイマー」 「タイマー、鳴ってるぞ」 「お、でつきたっかな」 「そう言っつて、友人はカップ麺のフタを開ける。眼鏡が曇る。しかし電子音を止めようとしない。 「おい、『早く止める』って言うてるぜ？」 『俺のことなんか構うな』 って言ってるんだよ。それがコイツの仕事だろ？」 # t w n o v e l

「盲目」 電車はトンネルに入った。隣の青年二人は青臭い話をし出した。 「今の日本って将来真っ暗だよなあ。俺ら大丈夫かなあ」 「大丈夫だろ。ホラ、地下の生物って目が退化してるだろ？ それと同じで光があっても気付けないんだよ、きっと」 いつの間にか、窓の外は青空だった。 # t w n o v e l

「小巨人」 信号が点滅する。横断歩道を駆け抜ける。大地を感じたのは久しぶりだ。そういや神話には地球を支える巨人の話があったよな。でも、だとしたら巨人と惑星一つを足した、もつと重いそれを、誰が受け止めているのだろう？ 「お前の仲間か？」 ちょうど靴紐がほどけていた。 # t w n o v e l

「歯ブラシ」 朝、ちょうど俺が顔を洗おうとした時だ。 「ちょっと、使い終わった歯ブラシ捨てるなんてもったいないよ。掃除に使えるんだから」 「でもそれって可哀そうじゃない？」 「そうかな。『第二の人生』があるワケでしょ？ それって捨てられるよりずっと良いと思わない？」 # t w n o v e l

「魚骨」 「こないだ魚の骨がノドに刺さっちゃってさ。これだから魚は嫌いなんだ」 「ハハハ、それは君が食べ物を尊んでいないからだね」 「言い古された説教だな。そんなの死語だぜ？ 信じるだけ無駄だよ」 「ホラ、やっぱり分かってない。それが釣られた魚の気持ちなんだよ？」 # t w n o v e l

「見世物」　夕陽が差し込む電車の中に高校生達の会話が響く。「
ねえ、　　って芸人いつ消えると思う？」「そんな話されてる時点
で、もう消えたも同然だろ」こんな会話で芸人は消えて行くのか。
でも、俺はそんな一時の笑い話にもなれずに消えて行くのだ。中吊
り広告は今日も揺れる。

「鬼」　　ついに完成した。それが何かを判別するロボットだ。「あ
れは何だ？」「あれはTVです」ちょうど芸能人の謝罪会見を取り
上げている。「じゃあそこに映ってるのは？」「あれは人に見える
鬼です」もちろん、本当に謝ってるんですかね、なんて言ってるコ
メンテーターのことだ。　　# t w n o v e l

「レジ」　レジ打ちのバイトを始めて3カ月くらい経ったある日。
『あれ？』商品にバーコードが付いていない。「すみません。値段
を確認してきます」「いえ、あの……」誰かと思えば、よく見かけ
る女の子だ。「それ、あなたに」そう言えば、最近チョコレートが
よく売れていたっけか。　　# t w n o v e l

「レジ2」　「レジ打ちのバイトしてたらチョコ貰ったって？　そ
んなのあり得ないだろ」思わず、そんなTwitter小説を書い
た作者に文句を言いたくなってくる。そんなんで貰えるなら、誰も

苦労しないのだ。『あれ？』バーコードが無い！……ってバラ売りのタマネギじゃねえか！ #twnovel

「宝物」 「いや、無くした手袋が落とし物窓口に届いてて良かったよ。昨日は特に寒くて、感覚が麻痺しちゃってヤバかったんだ。やっぱり大切な物って無くしてから気付くもんだね」「おいおい。一度でも無くしちゃいけない物だつてあるだろ？ 拾い主にお礼言えてないじゃないか」 #twnovel

「静かなる嘘」 ある日、道に猫のストラップが落ちていた。「危ないぜ」見えるようにガードレールの上に置いてやった。翌日、その近くの喫茶店で彼女と待ち合わせていたら、その窓辺でご主人を探すそいつがいた。「拾ってくれた人に感謝しなきゃね」言い出せるはずがなかった。 #twnovel

「懺悔」 悪友にメールを送ろうと電話帳を開く。そいつの下に、中学以来会っていない女子がいる。俺に本命のチョコを渡した唯一の女子だ。返事をできない自分がまだそこにいる。両想いかもしれなかった女子との淡い関係だつて、その子と彼女の親しい関係だつて、もう終わったのに。 #twnovel

第二巻 囁き鼠

「未来」 「本当に将来が見えないよな。せめて一歩先でも分ければ、進んでやるのにさ」食堂を満たして余りある若者の憂いに、仲間が答える。「何言ってるんだ。未来は見えないものさ。いや、見ちゃいけないな。だって眩し過ぎるだろ」そうだ、俺もただのバカな学生じゃないか。 # t w n o v e l

「心霊写真」 「見ろよ。心霊写真だ！」「ハア？ そんなワケ……」 本当だ。こないだの集合写真に肩から伸びる白い手がハッキリと写り込んでいる。「なあ、この手何か指してるぞ」「ん？ オレの……首か？」数日後、彼は職を失い、自らの命を絶った。クビになり、首を吊ったのだ。 # t w n o v e l

「天象儀」 「大学って人生のプラネタリウムって言うけどさ」「おいおい、それを言うなら『モラトリウム』だろ」「あつ、そだね」コイツはいつもそうだ。知識を披露したがるくせに、どこか抜けている。でも、よくよく考えてみれば、今回はあながち間違いとも言えないよな。 # t w n o v e l

「Q&A」 Qは叫んだ。「叩かれることに甘んずる。こんな運命を嘆かなくてどうしろというんだ！」Aが答える。「お前はまだ良い方だろう？ 俺の方が叩かれる頻度が多いんだから」ちなみにこの140字で、Qは3回、Aは40回叩かれた。 #tw

novel

「交代」 また変な会話を聞いてしまった。「あゝ、疲れた」「やっと交代ですね」「Kさんは良いよねえ。担当期間短いし、オイシイ位置だし」「いえいえ。Mさんだって世界中で祝って貰ってるじゃないですか。私の場合、恨まれる方が多いんですよ」睦月の次は…… 何だったっけか。 #tw

novel

「タグ」 別の奴らも、バカな会話をしている。「なあ、 #tw novel って知ってるか？」「知ってるよ。Twitter小説を書くときに付けるハッシュタグだね」「じゃあさ、なぜそんなこと聞いたと思う？」「うゝん、分かんないなあ」「俺とお前のこの会話がTwitter小説だからだよ」

「記憶喪失」 「ん、ココはどこ？」 「ココは潜水艦だよ。ホラ、ちゃんと操縦して！」 乗務員だろうか。女が俺に指示する。咄嗟にレバーを掴み、岩を回避する。が、今度は巨大海底生物！ 「何なんだ、一体！」 「やっぱランドよりシーの方が楽しいね！」 # twnovel # monogatari

「狼男」 狼男は何とか電車に間に合った。周りの人間は一斉に驚きの表情を向けたが、すぐに元のように座り直した。普段ならできないが、今日は助かった。空いている席に何気なく座り、おじさん達の会話に耳を傾ける。「今じゃハロウィンも年中行事の一つだな」 # twnovel # daihitsu

「論争」 小学生はどちらかというとイヌ派らしい。この話をするといつも笑われるのだが、真面目な話だ。義務教育の時期、とりわけ小学生は「規則に従順であれ」と指導されているのが、その原因ではないだろうか。その証拠に、大学生は見事にネコ派なのだ。 # twnovel # daihitsu

「甥」 甥は後悔しているのだろう。さっき買ってやった玩具を、寂しい顔で見つめている。「やっぱり別の方が良かったか？ 今なら戻って返品だってできるぞ？」「いいよ。だって僕、大人だからハハーン。さては、俺が先週リストラされたことを聞いたな？ #twnovel #daihitsu

「楽団」 一通り差し入れを配ってから発表する。「『ひいて』ばかりなので、弦楽器の皆さんにはオマケで『押寿司』です！」その後しばらく練習を見ていると、一人落ち込んでいる奴がいる。「しまった」彼はピアニストへ渡すのを忘れていたことに気付いた。
#daihitsu #twnovel

「暖」 「お、暖かいな」「おかえり。エアコンついてるからね」「『働かせている』の間違いだろ？」「人聞きの悪いこと言わないだよ」「じゃあ、エアコン聞きの悪いこと言うんじゃねえよ。『ストップ、温暖化』って思いながら働かされて、板挟みになってるかもしれないんだぜ？」 #twnovel

「鼠」 ネズミはドアノブを掴んだ。閉じ込められた仲間たちが、じつと見守っている。「とうおりやあぁっ！」ガチャンっ。ドアが開いた。仲間たちは御礼と共に四方八方へ逃げ散る。「先生！天才遺伝子を導入したマウスが逃げ出しました！ 実験成功です！」

#daihitsu #townovel

「姫」 お姫様はいつの間にか姿を消していた。「こつちよ」さっきまで傍にいた彼女は、洋館の二階から僕を見下ろしていた。「まさか」「あら、気付いた？」彼女の髪が妖しく揺れる。「幽霊の噂は本当だったんだ」「失礼ね。双子の妹の私が隠れてただけよ」

#townovel #daihitsu

「チェンジ」 「テストの前日って、突然模様替えしたくなるよね」「……したんだ？」「悪い？」そこで教室のドアが開く。一瞬で喧騒が消えた。いつも固く結ばれている先生の口が開く。「今日はテスト……の予定だったが、模様替えしたらテストが完成しなかったので延期にします」 #townovel

「見落とし」 忙しい時に限って整理したくなる。「俺は何をせうにここまで来てしまったのだろう」そんな問いに反応するように、隙間に落ちた紙切れが視界に入る。一年前、独り暮らしを始める時に両親から渡された「やることリスト」だ。「俺は誰のお陰でここまで来れたのだろう」 # t w n o v e l

「過敏」 「おはよう、蜂さん」名前を知らない彼は毎朝お辞儀してくれる。「こんにちは」「こんばんは」いつもお辞儀してくれる彼に、ある日尋ねてみた。「あなたは日本人?」「いいえ。お辞儀をするのは似てますが、違います。紛らわしくてすみません」そう言っただけは頭を下げた。 # t w n o v e l

「酸」 テスト後の教室は、戦況を交換し合う生徒で溢れる。「酸素って画数多いから嫌いなんだよねえ」「そうそう、特にテストの時とか面倒だね。誰がこんな名前にしたんだか」そんな会話には、天から声が届いているのを忘れてはならない。「『acid』を訳した奴に言ってくれ」 # t w n o v e l

「メシア」 隣の家族連れの会話に、突如耳が反応した。「お父さん。僕はどうやって生まれて来たの？」随分と答えづらい質問をする子だ。と思ったが、父親はためらう素振りを見せない。さすがだ。「お前はお姉ちゃんを助けるために生まれて来たんだよ」どうやら親に似たらしい。 #townovel

「囁き」 最近、部屋に一人でいると、妖精のような声が何度も聞こえてくる。何故だろう。今日も、耳元で囁いている。「絶対に見ることのできない悪魔って、何だと思う？」「うーん、お手上げ」「それはねえ……睡魔だよ。姿を見られたくないから、人間の瞼を重くさせるんだって」 #townovel

第三卷 日陰運命

「診察」 看護師は刀を手にした。皆、それを黙って傍観するしかできない。彼女は、前線の野戦病院にいる以上、戦わなければ俺達患者を助けられないと考えたのだろう。「では往診へ行ってきましたね」その時には、俺はこめかみに銃を当て、引き金を引いていた。

#daihitsu #townovel

「象徴」 横断歩道の縞が、きつちりと綺麗に並んでいる。それを眺めて、その象徴する意味みたいなものを考えていた。そこに作業員のオジサンたちが通りがかって、そのうちの一人が横断歩道を指差した。「何だコレ」「どした?」「曲がつてるじゃねえか。俺だつたらやり直させるよ」 #townovel

I used a pencil found in a way
through the math test. Today
teacher says, "I've got you wrong."
Artistic pictures were my answer.
#townovel

「A DAY」 オフィスチェアに座りながら、天井を仰ぐ。両足で勢いをつけ、時計回りに回ってみる。景色が逆さまになって、戻って、そうして何度も回転する。まるで自分が地球の自転軸にい

るかのような錯覚に陥る。そこで自分に問う。「お前の毎日は、こんなもんか？」 # t w n o v e l

「価値」 会計で一円玉を取り出すと、レジ打ちのバイトの眼が一瞬だけ嫌そうになった。汚れがひどい一円玉だったからだ。これでも一円の価値が保障されていることを、無意識に妬んでいるのかもしれない。こいつが一円の価値を守り続けて来た半世紀は一体何だったのだろう。 # t w n o v e l

「慈善」 久し振りに日本へ帰って来ると、「悪い奴はココ」という矢印の看板があちこちに立てられていた。最近流行りの「匿名の慈善活動」ってやつらしい。おかげで街中の落書きやゴミがそこへ故意に集められ、街は綺麗になった。人々は失っていた笑顔を取り戻した。ああ、汚い。 # t w n o v e l

「本望」 ある友人が自殺したと連絡があつた。苦勞の末に大成し、先月子供が生まれたばかりだというのに、である。後日、彼の遺書が見つかった。そこにはこう書かれていたそうだ。「いつ再び不幸がやってくるとも知れません。だったら幸せの絶頂にいる今のうちに、死んでおきます」 # t w n o v e l

「月」 綺麗な満月が、俺の帰り路を照らしている。「どうだい？

これで通りやすいかい？　ちゃんと見ていてあげるよ。独りは寂しいからね」なんて声が聞こえてきそうだ。もしそうだったら、俺はこう言ってやる。「あいにくだけど、表の顔ばかりで裏の顔を見せない奴は嫌いだよ」　# t w n o v e l

「茹人」　野菜と肉を鍋につつこんで、茹でる。ふと、まだ心を躍らせていた入学式が昨日のように思い出される。そう言えば、あと少しで院の入試か、と鍋の中で踊る彼らを見ながら気付く。スープの素の袋に書いてある茹で時間はとくに過ぎているが、湯からあげる気は、まだ無い。　# t w n o v e l

「日陰」　私は運命を恨んでいる。なぜ日陰に咲く花なんかに生まれてしまったのだろう。そう愚痴ると、アリはこう言った。「日向にいる花なんか、どれだけ多く光を得るかしか考えてない。日陰にいるから、光が欲しいなあ、って思えるんですよ。それって嬉しいじゃないですか」　# t w n o v e l

「運命」　「あなたの運命、かえませんか？」俺はそう訴えた。「宗教はちよつと」「いえ、その良い運命を売って下さいと言ってるんです」真剣に懇願する俺の前で、彼は一言こう答えた。「運命に良し悪しなんて無いですよ。他人のは良さそうに見えますが、実際そうでもないですから」　# t w n o v e l

「発掘」 「あ」新聞の小さな記事が、俺を眩かせた。また新種の恐竜が発見されたい。ただの会社員の記憶の隅の小さい頃の憧れが”発掘”される。ふと記事の下に目が行く。「化石発掘ボランティア募集中」何かが変わる訳じゃないけれど、問合せ先を頭の中で復唱する自分がいる。 #twnovel

「埋蔵金」 作業の手を止めて、縁側に腰を下ろした。昔の体力はもう無いなと実感する。庭ではポチが穴を掘っていた。「婆さん、ポチが埋蔵金を掘り当てるかもしれんぞ」なんて言っていると、穴からお菓子の缶が姿を現した。途端に記憶が蘇る。「そうだ、通帳は庭に隠したんだった」 #twnovel

「報せ」 NASAの会見が一斉生放送されている。ついに異星人からのメッセージが解読されたからだ。それが英語で読み上げられた途端、会見場は凍りついた。「一体何があつたんだ？」遅れて、それは通訳された。「【重要】本ゲームをご利用のユーザーの皆様へお知らせです。……」 #twnovel

「図鑑」 私には最高の宝物がある。それは、色々な人生が書かれた図鑑だ。失敗の愚痴とか、自分の居場所を探していることとか、誰にも言えない不安とかについて、普段の生活では、隠されてしまっていることのできない人生でも、そこに載っている。その図鑑の名は「タイムライン」。 #twnovel

「破壊者」 よく当たる占い師がいるらしい。友人もそれを真に受けている。だから俺はその占い師へ言つてやった。「あんたは何人の希望を台無しにしたんだ？」「何と失礼な。むしろ希望を与えているじゃないか」「未来が分かつてたら、生きていく喜びなんて無いに等しいだろう？」 # t w n o v e l

「勝ち」 「楽しく生きた奴の勝ちだ」それが親父の口癖であり、最期の言葉だった、らしい。俺は死に目に会えなかったのだ。葬儀ではあちこちでどつと笑いが起こる。最後に顔でも拝んでやるか……あれ？ 潤んだ視界の向こうで、親父は白い歯を見せながら、口元に人差し指を当てた。 # t w n o v e l

「相棒」 「俺の身にもなってくれ。毎日夜遅くまで付き合わされて、無理してんだぜ？ まだ続くなんてゴメンだから、頑張ってくれよな」シャーペンも、コイツなりに気遣ってくれているらしい。そして試験は始まった。そうそう、大学で最初のノートの担当は前だから覚悟しとけよ。 # t w n o v e l

「消去」 過去を消せる消しゴムが発売された。友達も家族も、皆がそれを使つて赤点や失敗や失恋を消した。そのおかげで、暗い顔をする人はいなくなつた。そしてとうとう使っていないのは僕一人

になった。でも僕は唯一消せないものがあることを知っている。誰もそれに気付かない。 # t w n o v e l

「封印」 過去を消せる消しゴムを、俺は極秘に発明した。全ての失敗を消すと”天才”と呼ばれるようになったが、一人だけ相変わらず俺を名前で呼ぶ奴がいた。ある日その理由を尋ねてみた。「だって、陰で努力してるんでしょ？」その後すぐ、俺は消しゴムをゴミ箱に投げ入れた。 # t w n o v e l

第四卷 共鳴試験

「助け」「ありがとう」「赤ずきんは頭を下げる。」「むしろ俺が助けてもらっただよ」「この子は俺を獵師だと思っているが、実際は俺が銃を持っていただけだ。」「どうしてそんなに悲しい顔なの?」「いつの間にか頬を熱い滴が伝っていた。」「いや、嬉しいんだ」 # t w n o v e l # d a i h i t s u

「希求」俺のことは人間には見えないはずなのに、なぜか人間は俺を追い求める。時には汚い手を使ってでも、一生懸命に俺を掴もうとする。だが無駄だ。俺を掴むことなんてできやしない。俺はさらにその先にいるのだから。さあ来い、人間。今日もお前の悪あがきを見ていてやろう。 # t w n o v e l

「月蟄」僕には優秀な幼馴染がいる。文武両道、品行方正、とにかく何でもできる。比較対象は当然のように僕で「月とスポンだね」といつも言われる。確かに僕はスポンのように、ダメ人間の代表だ。だが僕は気付いている。月がそうであるように、彼は最近生きた眼をしていない。 # t w n o v e l

「試験」入試が今まさに始まった。問題が一体何なのか、この瞬間に明らかになる。カンニングだって、この問題には全く歯が立たないだろう。真っ白な問題用紙には、ただ一列の黒い明朝体が並ん

でいる。「問・あなたは何のために生きるか？」試験時間は、あと数十年ほど残っている。 # t w n o v e l

「見棄」 コンビニ弁当を広げ、ソースを揚げ物にかける。ソースの袋には僅かに中身が残っているが、もう出ないだろう、とゴミ箱へ放る。さて今日の派遣先はどこだろうか。携帯を広げたところでふと気付く。急いで床を這い、ゴミ箱へ手を突っ込んだ。良かった、まだ汚れていない。 # t w n o v e l

「居場所」 この世のどこかに、自分のいるべき場所があるらしい。でもそれはいつも蜃気楼のように消えてしまう。それがイヤで、私は道端で歌い出した。やがて人が集まり、仲間ができた。これも幻だろうか。一人が呟いた。「蜃気楼つてのは幻だけど、その先には本物があるんだよね」 # t w n o v e l

「共鳴」 「今日もアイツウザかった!!」そうツイートすると「大丈夫。明日がありますよ」「そりゃ酷いwww」なんて励ましや同情のリプライが沢山来る。それを呟いたのは、誰あるう俺である。今日もそんな、その場限りの憂さ晴らしを……あれ? 知らないリプライ……!! # t w n o v e l

「再会」 終電を降り、最後に改札を抜けて、出口に伏せている犬

へ目を遣る。こいつは毎日主人の帰りを待っているらしい。しかし最後の私が出ると、悲しそうな背中どこかへ行ってしまうのだった。ところが今日は瞼を閉じて寝ている。まるで主人に会えたかのように嬉しそうな顔で。 # t w n o v e l

「節穴」 「『注文の多い料理店』って面白いよな」学食で昼飯を食べながら、友人が唐突に言ってきた。「まあな」「だろ？ 大人のくせにドアの注文を真に受けるなんてあり得ねえって」そう語る彼の後ろで、テレビ画面は情報番組を映している。「巷で大ブームの宮沢賢治ですが……」 # t w n o v e l

「願い」 「代打、滝沢」場内アナウンスが響く。俺はゆっくり右打席に入る。明日手術だという難病に侵された少年、山田君との約束を果たす時が来た。一打逆転の大チャンス。初球、大好きなコースに甘い球が来る。だが俺はわざと詰まらせ、内野ゴロにした。ダメですよ、山田さん。 # t w n o v e l

「上隣」 上の階の住人は、音痴な歌を大音量で歌う。発表会が近いならまだしも、半年ずつとこの調子である。今日は頭が痛いから早く寝たいのに、お構いなしだ。だから今日こそは文句を言いに行つてやる。部屋の前に行き、ノックしようとした。が、そこで表札に気付く。「現在空室」 # t w n o v e l

「紛失」 落とし物をしたという拡散希望をよく見かける。でも傍観者のオーラを身に纏い、自分なんかR Tしても役に立たないという正論を懷に忍ばせて、R Tすることは無かった。だが今日のは違う。迷うことは無かった。なぜなら、彼が無くしたのは「明日への希望」だったからだ。 # t w n o v e l

「DNA」 センター試験は散々。前期試験もまるで感触が無い。その直後の面談で、担任の生物教師が尋ねてきた。「DNAって何の略か知ってるか？」何でこんな時に、と思いつつも答える。「デオキシリボ核酸ですよ。」「いや、違う。どんな時でも、何があっても、諦めるな」 # t w n o v e l

「葉書」 保健室の先生が俺に相談してきた。毎年恒例の学校郵便で、差出人不明の葉書が来たらしいのだ。それも「好きです」の一言だけ。「可愛いですよ、子供って」彼女はそう言って笑う。だが、文字が小学生にしては綺麗すぎることに気付いていない。やはり手ぬるかったか。 # t w n o v e l

「群れ」 父が新しくメダカを貰って来たので、元から飼っていた水槽に入れてやった。だが群れに入りづらそうにしているので、一匹だけ別の水槽に移してやると、翌日には死んでしまった。そいつを土に埋めながら、俺は放置していたツイッターのパスワードを思い出そうとしている。 # t w n o v e l

「独自」 オリジナルなついのべを書こうと思い立った。まず、ありきたりな言葉は使わないようにした。それでも足りないのが、今度は英語で書いた。結局、俺は新しい言語を作って書いた。誰も読めなくなっただけいい。俺は俺の書きたい物を書くんだ。さて、どうやってツイートしようか。 #townovel

「体験」 「学びとは体験だ」そんな恩師の言葉を胸に俺は理科教師になった。今日の課題は「対流」。恩師の言葉通り、一人ずつ脚立に登らせて天井の空気が温かいのを体験させていく。すると最後に登った子が不意に尋ねて来た。「きつと今おばあちゃんは、温かくて幸せなんだよね？」 #townovel

「音痴」 帰り道には、いつもストリートミュージシャンがいる。素人でも分かる音痴なのだが、彼の歌を聞くのが私の日課だった。ある日、淡い期待を漂わせて彼が尋ねて来た。「何で音痴な僕の歌を聞いてくれるんですか？」「私に似ているから、かな」このことは後で呟いておこう。 #townovel

「形」 友人の家が火事になった。急いで病院へ向かったが、幸いベッドの上の彼は元気そうだった。「無事で何より」「でも、全部無くなっちゃった」「『形ある物いつかは壊れる』って言うだろ」

「いや。無いんだ、記憶が」黙ってしまった彼に、俺は言った。「記憶に形なんかないぜ」 # t w n o v e l

「大盛」 我が「大森らーめん」は、名前の通り「大盛」が売りだ。最近雑誌にも載り、嬉しい悲鳴を上げる毎日過ごしている。そんなある日、一人の大食いの客が目にとまった。古い友人に似ているのだ。「もしや、大杉か？」すると彼は言った。「多すぎどころか、少なすぎですよ」 # t w n o v e l

第五卷 円錐洋館

「塵積」 今日、自販機の下に手を伸ばすスーツ姿の男がいた。いい大人の何と見苦しいことか。そういや昨日もおばさんがそうしているのを見たっけか。日本も終わりだな。そう思いながらツイタ―を開くと、TLの拡散希望の文字が目に入った。「自販機の下のお金も募金箱へ！」 # t w n o v e l

「窓口」 こんな僕でも誰かの役に立つのなら。そう思っただけで募金窓口に向かった。と、会った瞬間に受付の女性が大声で「ありがとうございます！」と頭を下げた。「いえ、僕にはこんなことしかできませんが」だが彼女は首を振った。「だってあなた、昨日私の家に入った泥棒でしょう？」 # t w n o v e l

「ゴミ」 道で男が転んだ。人々は道を塞いでしまった彼を指差して言う。「邪魔なんだよ」「転ばないように、いつも気をつけるよ」「会社に遅刻したら賠償だぞ」当の彼は、膝小僧から血を流しながら頭を下げている。どちらがゴミかは問わないが、あなたはゴミかと尋ねたい。 # t w n o v e l

「講義」 ……しかし、古代人類も世界中至る所との情報のやり取りが可能だったことが幾つかの古文書に見られます。これは”SNS”と呼ばれておりますが、その遺物及び遺跡は発見されておらず、

未だ考古学史上最大の謎となっているのが現状です。…… # t w
n o v e l

「笑」 あなたは今日三回笑いました。最初は、場の空気を呼んで面白くも無いのに笑いました。二回目は、言葉に詰まってその場しのぎに笑いました。三回目は、そんな駄目な自分を嘲笑いました。そんな今日は、あともう一回だけ笑って終わりにしましょう。生きている喜びに向かって。 # t w n o v e l

「恐怖」 野性の生き物たちは未来を憂うなんてしないのに、ヒトは未来に恐怖する。今の生活が無くなるのではないか。再び天変地異が起こりはしないか。それは普段は意識せずとも、何かをきっかけに突如現れる。それはまるで、扉の向こうの未知に気付いてから扉に恐怖するように。 # t w n o v e l

「ヘドロ」 大勢が見守る中、敗軍の将が処刑台に立った。あちこちからヘドロのような罵声が響く。だが彼は満足していた。人々の心の中にある底無し沼の栓を抜くことができたのだから。ヘドロは無くならないが、いずれ沼は水溜まりくらいになる。そう信じた平凡な命が、一つ消えた。 # t w n o v e l

「円錐」 円錐を円だと見る人もいれば、三角に見る人もいる。断

面から楕円だと見る人もいるし、切り取って台形だと見る人もいる。そして誰もが、これこそが真実だと信じている。誰も間違っていない。でも、それが真実ではないことに誰も気付こうとしない。自由は免罪符だろうか。 # t w n o v e l

「夢」 何気なく、トランプを二枚もたれ合うように立たせた。そしてそれをもう一つ作り、一枚を慎重に上へ乗せようとした所で、城は虚しくも崩れ落ちた。でも私の手は再び二枚を取って、立たせようとしている。いつか完成するはずと信じれば、夢い一步にも意味はあるはずだから。 # t w n o v e l

「想像」 眼を閉じて手探りで何かを拾い、その色形を30秒間思い出してみよう。例え自分の机の上であっても、案外見落としていたり想像とは違う部分があることにすぐに気付くはずだ。もしそうなら、あなたが一番信頼している人の心を想像して欲しい。何か見えないだろうか。 # t w n o v e l

「潜虫」 ダイビングビートル、なんてカッコいい名前もあるゲンゴロウは、尾につけた空気の泡を酸素ポンベにする水生昆虫だ。実は分圧の関係で、泡に元々含まれていたよりも酸素は多くなるらしい。カオスな社会へ潜るダイバー達の酸素ポンベにも、そんな機能があればいいのに。 # t w n o v e l

「真実」 「どうしたらいいと思う？」電話の向こうの友人は、彼女に別れを切り出されたらしい。「真実を見ればいいんだよ」「簡単に言うな」「簡単だよ。眼を閉じるんだ」「そんなんで見える訳が……」彼女の手作りだと自慢していたストラップの鈴が携帯の向こうでチリンと鳴った。
t w n o v e l

「洋館」 奇妙な招待状が届いた。「我々の宴にご招待します」差出人は不明だ。好奇心で訪れると、そこは山奥の古びた洋館だった。少々不安ではあったがノックすると返事があったので、私はほつとした。が、扉の向こうの会話が聞こえてしまった。「ママ、人間の肉が届いたよ」
t w n o v e l

「宴」 私は捕まった。誰に、と問われたら怪物だと私は答える。どうやら私は宴のメインディッシュらしい。まだ生かされているということは、良い食われ方はしないだろう。そんな絶望の淵に立つ私の耳元で、不意に声がした。「助けてあげようか？」声の主は、あの怪物の子供だった。
t w n o v e l

「山道」 私の軽自動車は山道を転がるように駆けた。怪物の子供を乗せて。彼はずっとあの洋館から出たことが無く、友達がいないかったのだそうだ。それにしても、すっかり承諾してしまったが、彼の交換条件は無茶すぎた。「まだ僕の友達の所に着かないの？」さてどうしよう？
t w n o v e l

「コンビニ」 少し開けた場所に出た。街の灯りを見てみると、さつきまでの体験が夢のように感じられる。一方、彼は窓にへばりつく、興味の眼差しをあちこちへ向けていた。「これは何?」「コンビニだよ」「コンビニって何?」「何でも売ってる所」「じゃあ友達も売ってるの?」 # t w n o v e l

「友達」 どうしても言うので、目立つ顔を帽子で隠してやってコンビニへ入った。途端に「友達はどこ?」と商品を散らかし出したので、仕方なく「これが友達でどう?」と玩具を見せた。一瞬キョトンとしていた彼だったが、すぐに眼の色が変わった。「やっと会えた! 僕の友達!」 # t w n o v e l

「夜明け」 夜が明ける頃にアパートに着いた。気付けば彼はぐっすり眠っていた。その手にはコンビニで買った玩具が握られている。起こさないように部屋まで運んでやりながら、約束を果たす方法が頭に浮かんで消えていく。しかし、怪物というのはこんなに体温が冷たいのだろうか。 # t w n o v e l

「季節」 春は桜。夏は花火。秋は紅葉。冬は雪景色。どの美しさも人の心の窓を叩く。そして煤けた硝子をちよつとだけ綺麗にして去っていく。その後ろ姿を眺めながら、誰もが窓ガラスに溜息を吐

く。でも嘆いてはいけない。出逢いが別れだからこそ、心の窓に映るのだから。 # t w n o v e l

「雨」 雨。それは古来より人に課せられた大気現象である。雨が降ると、人はその場しのぎに、傘の下や物影へ身を隠す。そしてその口から憂鬱に染まった溜息を、濁った水溜りへ吐き捨てる。でも雨は悲劇ではないことを人は知っている。【あ】明日には【め】芽が出るのだから。 # t w n o v e l

第六卷 掌信号

「小虫」 名も分からない小さい虫が机の上を這っている。1ミリずつ、その脚を一生懸命に動かしている。彼にはこの机の上が荒野か砂漠に見えるのだろうか。私は「頑張って生きろよ」と声をかけようとしたが、止めた。どうせ「そんなの当たり前だろ」と返されるのがオチだろうから。

t w n o v e l

「掌」 今日は何かが変わっただろうか。そう思ったら、掌を開いてじつと見つめてみよう。その掌は昨日とどこが違うだろうか。もちろん分かる訳ない。でもその掌は生きている掌だ。常に細胞は生まれ変わっていき、昨日とはちよこつとだけ違う。それってやっぱり、嬉しいじゃないか。

t w n o v e l

「鑑定」 俺は「何でも鑑定人」。依頼された物事なら、骨董品だろうが人生の選択だろうが、何でも良し悪しを鑑定するだけの簡単な仕事だ。だけどもある日、依頼人からクレームが来た。「あなたはいつも『それは良いことですよ』としか言わないですよね?」「それは良いことですよ」

t w n o v e l

次にこの故郷へ帰るのはいつになるのだろう。新しく現れた空欄に何を書けばいいのか分からないまま、記憶のページが止めどなく開かれていく。そんな【春】遙か彼方の【夏】懐かしい日々が、

【秋】空きの目立つ上り列車の車窓から 【冬】浮遊して消えてしまふような気がした。 # t w n o v e l

久し振りに開けた引き出しに、かつて自殺した親友が俺に宛てた遺書が入っていた。「憧れていた、理想は遠くて、ガラスのような僕の心は、とても弱くて脆くてどうして、生まれちゃったんだろうね」そう言えば、なぜ読点がこんな位置にあるのだろう。その瞬間、俺の涙腺は崩壊した。 # t w n o v e l

【お】「おや、もう朝かい？」 【は】早起きな朝陽が、僕を眠りから覚めさせる。 【よ】陽気な挨拶は得意ではないけれど、その交換は背中をそっと押してくれるような気がする。 【う】嘘だと思ふなら、さあ、声に出してご覧よ。 世界はきつと、ちよつとだけ君の方を向くはずさ。 # t w n o v e l

「博士」 この素朴な男は、実は有名な考古学者だ。きつと考古学への情熱を内に秘めているのだろつとばかり、僕は思っていた。「先生はなぜ考古学を？」 「昔、ある書簡を見つけてね」「そこには何が？」 財宝の在処か、歴史的新事実か？ 「片想いに終わった不器用な男の日記なんだ」 # t w n o v e l

【F】不安というのは順応してしまうもので、 【I】いつまでも続く 【N】奈落のように先の見えない夜道を 【D】泥まみれになつて僕は駆ける。 【M】もしもその気配に気付いたのなら 【E】笑顔だけでも僕に向けてくれないか？ ” Find me!”
#townovel

「国」 ついにTwitter上に国ができた。当然、国民同士はTwitterでやり取りをする。参政権もしっかり保障されていて、下手な国より民主主義が徹底している。例えばこんな感じだ。
「首相の解任を求める方は、このツイートを公式RT！ 2000000RTで成立します」 #townovel

「兄弟」 兄貴は僕より脚が速くて、背も高い。つまりはカッコいいのだ。そんな兄貴と競争しても、僕はいつも追い越されるばかり。そんな僕の唯一と言つていい楽しみは、毎年大晦日にやつて来る。新年が始まると同時に、僕らは並んで競争を始め、皆がそれを祝福してくれるのだ。 #townovel

「時計台」 僕の街には古くて立派な時計台がある。その時計台には毎朝お爺さんが点検にやつて来るのだった。ある日、僕はそのお爺さんに声をかけてみた。「どうも。お仕事に精が出ますね」「いや、全然だよ。この時計なんてワシと同じ年なのに、今まで一度も休んでないんだからね」 #townovel

「愛別離苦」 「僕は必ずまた君に会いに来るからっ！」 「絶対……絶対よっ！」 「ああ、絶対だ。それまで待てるかい？」 「うん。また会えるって信じてるから」 「もう時間だ。行かなきゃ」 「ねえ、電池が切れてもまた会えるわよね？」 「それはどうだろう」 「長針は短針にそう言った。 # t w n o v e l

「とあるTL」 A「やった！ ついに念願のノベル賞取りました！」 B「おおw(*。o。*)w」 C「おめでとうございます！」 D「それどこの出版社の賞？ 検索しても見当たらないんですが」 A「すみません、長音入れ忘れましたm(——)m」 一同「えっ……!?」 # t w n o v e l

「正午」 「どうせまた正午に会っただし」 そう言っつて長針は短針と別れた。彼にとつて別れは日常茶飯事。人間は別れを悲しむが、それが彼には分からなかった。だが暫くすると、突然長針の脚から力が抜けた。電池が無くなったのだ。そして長針は知った。愛しい人に会えない悲しさを。 # t w n o v e l

「人生」 人生は小説に似ている。小説が人生に似ているのかもしれないが、とにかく似ている。だが「事実は小説よりも奇なり」と言われるように、決定的に違うものでもある。人生は誤字・脱字を直すことも、初めから書き直すことも、この世に留まっていること

も、できないのだから。 # t w n o v e l

「不屈」 私には不屈の友人がいる。その体を地面に擦りつけられて、頭を次々叩かれて、それでも自らの仕事を誇りを持ってやり遂げるのである。その小ささを嘲笑うかのようなあだ名で呼ばれても彼は一向に気にしない。「だってマウスって十二支で一番最初じゃないですか」 # t w n o v e l

「信号」 人もまばらな時間。雨の中、赤信号を待ちながら傘を握っていない手で携帯を開く。気付かないうちにメールが届いていたらしい。差出人は、こないだの入学式で知り合った奴だ。「せつかく大学入ったんだし、俺らでなんか新しいことやらないか？」信号が赤から青に変わった。 # t w n o v e l

「鋏」 「何でも切れるハサミ」というのを買ってみた。試しに嫌な上司との縁を切ると、上司は急な転勤が決まった。そこで私は考えた。自分と社会を切り離せば、法を越えた存在になれるはずだ。そして私は見事に社会との隔絶に成功した。だが無人島での暮らしには慣れそうにない。 # t w n o v e l

キャンプ最終日は、月が出る頃に夕飯の準備となった。火にかけた鍋へ水が注がれ、間もなく良い香りが漂い出した。木のテーブルに

はお金に余裕があつたから買ったスイカが載っている。食後、土の上に散らばった種からはきつと芽が出るだろう。この「一週間」で育まれた友情のように。 # t w n o v e l

【お】重い指先を動かしてキーボードを叩いてるよりは、 【や】
柔らかいベッドに包まれて 【す】好きな人が出てくる夢をお願い
してみよう。 【み】見事に願いが叶ったなら、明日は頑張れるは
ずさ。 # t w n o v e l

第七巻 花火ボスト

つまらないことで彼女と喧嘩した。「頭冷やして来れば！」という言葉通りに暫く散歩して部屋に戻った。多分こんな男だからダメなのだ。やはり彼女はいない。しかし扉の開いた冷蔵庫の中に見知らぬプリンがあった。「勝手に食べちゃってゴメン」その冷気で頭は冷えたが、心は違った。 # t w n o v e l

あの時こう言っておけば良かった。そんな後悔をシャワーで流せるはずもなく、髪の毛をドライヤーで乾かしている間もずっと、私の眼だけは濡れたままだった。その時、メールの受信を知らせるランプが光った。この時の私はまだ知らなかった。それが涙を乾かすドライヤーになるなんて。 # t w n o v e l

「紫陽花」 アジサイの色は自分だけでは決められない。それは人間が相手によって顔色を変えるのに似ている。案外、アジサイも人間も、どれが本当の色か、なんて悩んでいるかもしれない。でも、きつと大丈夫。アジサイにも人間にも、その名の中に煌々と輝く”太陽”があるのだから。 # t w n o v e l

ヒトは高等生物だ。そんな無知蒙昧を騙る人間がいるらしい。だが真実は違う。ヒトもゴキブリもミジンコも、進化の上では平等だ。なぜなら、大地の上で進化という舞いを今までずっと躍り続けてい

るのだから。真に彼らより劣っているのは、過去に固執して生きている生き物しかない。 # t w n o v e l

何となく筆が進まないある日、私は強制的にカラオケに参加させられてしまった。時間が減るより、他人の歌の間に考えても文章が浮かばないのが辛い。その時ふと、歌う人達の姿を見た瞬間、書けない理由が分かった。自分もこんな風に、下手かどうかなんて気にせずには書けないんだ。 # t w n o v e l

小学生はタンスの上に飛び乗った。秘密基地なのか、ガラクタの山ができていた。「おい、やめろって」通りすがりの高校生としては、最適な判断なはずだ。ところが、そのガキは涙を浮かべていた。「おばあちゃんに会いに行くんだっ！ 邪魔するなっ！」「なんだ、肩車要らないのか？」 # t w n o v e l

「短いかなあ」そう呟く弟が書いているのはお礼文である。何でも無くしたペンが理科室の自分の所に置いてあつたらしい。それを弟は誰かが探してくれたのだと信じているが、俺はそうは思わない。だってそのペンは俺が、誰も使うことのない古い人体模型の中に隠したのだから。 # t w n o v e l

アンカーの俺に二番手でタスキが渡された。すかさずコーチから檄

が飛ぶ。「時速1300kmで走れ!」「???」「いいか。今お前は真東に走ってる。だから、地球の自転に乗っかって今のお前は時速1300kmだ!」"そういうことか"理解した瞬間、この脚は確かに軽くなった。 #townovel

「よお、何で泣いてんだ? 時速1300kmの涙だな」「泣いてなんかないっ! ていうか何で時速1300kmなのよ」「自転速度は赤道上では時速1700km。日本の緯度に直すと大体時速1300kmなんだよ」「だからどうしたのよ!」「そんだけ時間は早く過ぎてくれるのさ」 #townovel

落ち葉も鳥も人間も、時流という名の大風の中で自在に動くことはできない。そしてそこから逃れることもできない。その姿はまるで風見鶏のようだ。しかし、されるがままではつまらない。そいつに逆らえるのは、生きている奴だけである。さあ風見鶏よ、風は何処から吹いている? #townovel

「暑いのは嫌いだよ」「発汗によって体内の水分及び塩分・ミネラルが減少してしまうからな。勿体無い」「いや、そういう意味じゃないって」「ならば団扇で扇ぐ際の無駄なATP消費のことか?」「ふざけないでよ」「何を怒っている? 汗の気化熱で頭を冷やしてきたらどうだ?」 #townovel

不思議な地球儀を買った。回した分だけ時間が変動するのだ。これで俺は勝ち組になれる。このまま小学生に戻ればテストなんて楽勝だ。早速地球儀を回して……。しかし、次の瞬間俺は中年ホームレスになっていた。何故だ？ 太陽は西から昇るから、こう回せば……あれ？ 東だっけか？ #townovel

「今日って納豆の日らしいよ」「へえ。でも暑いのに納豆はあまり食べたくないな」「そう言うと思って作っておいたよ、特製納豆アイス！」「え！？ いや食べないし」「健康に良いよ」「だったら普通に食べるから」「ほら、ネバネバだよ」「そんなに粘る理由は何なんですか？」 #townovel

この町には使われていないポストがある。でも郵便屋の私が見回ると、いつも沢山ゴミが入っているのである。まるでポストが泣いているようだ。そんなある日、ついに私は犯行現場を押さえた、のだが。「ポストさん、た〜んとお食べ」子供相手に、ポストも楽しんでるのかもしれない。 #townovel

その昔、この地域を天災が襲い、草木が全て枯れてしまった時、とある男が一面を花で埋め尽くしたそうだ。しかし彼は神の怒りに触れて、焼け死んだらしい。今、ついに私はその彼の住居跡を発見し、魔法の秘密を知ることができた。そこには作りかけの打ち上げ花火が遺されていたのだ。 #townovel

帰り道。足取りは重い。嫌悪なんて感情が無ければ今日はもう少し良かったのにと、私は影に愚痴つてみた。影は車道を歩いて平気な顔をしている。それは花畑でも泥沼でも同じだろう。そこで私ははつとした。嫌悪するから人は歩くべき道を選ぶのかもしれない。途端に足が軽くなった。 # t w n o v e l

「もし神様に願いを一つだけ叶えてもらえるなら、何をしたい？」
いつもなら、彼女が欲しいとか、好きな仕事に就きたいとか、そんな言葉しか出てこないけれど、今は心の底からこう言えるから、今のうちに叫んでおこう。「私は、神様に直接お礼が言いたい！」
t w n o v e l

始まりがあれば終わりがある。書き殴った原稿用紙もいつかは土に還り、この140字にも必ず結末がある。しかし形無き物に終わりはない。物語は語り継がれ、140字の連鎖は世界へと広がっていく。 # t w n o v e l は、これからどんな物語を私達に運んでくれるのだろうか？ # t w n v d a y

【お】 恐る恐る胸に手を当てると 【は】 拍動が掌から伝わってくる。
【よ】 「よし、今日も生きている」
【う】 動きの鈍いこの体を、今日が鼓舞した。 # t w n o v e l

「今日もあなたはいなかった」そんな紙切れが今日も郵便受けに入っていた。これで半年近くになる。差出人の電話番号が書かれているが、私はもうかけたくないし、かけられない。そんな気持ちを伝える手段も、無い。だって知らなかったんだ。その宅配便が、父の釣った魚だったなんて。 #townovel

第八巻 脱獄ひぐらし

点いては消える蛍光灯。それはまるで僕の人生のようだ。時に光を放つけれど、次には輝きを失ってしまふ。そして輝きを完全に失えば……。僕は堪らなくなつてそいつを取り付け直してみると、やはり外れかかっていたのか、今度は光るようになった。僕も少し、生き方を変えてみようか。

t w n o v e l

帰りのバスを待っている間、何処から聞こえてくるのか分からないくらいに、ひぐらしの歌が響いていた。彼らはきつと、儚い命だからこそ歌うのだろう。でも嘆いてはいないはずだ。だって歌えるのだから。だとしたらコイツらに負けられない。握る携帯で、俺はついこのべを打ち出した。

t w n o v e l

雨の帰り道。あの時あいつに言った一言は誤解されたのだろうか。後悔が頭の中でぐるぐる回っていた。ついでに傘もぐるぐる回してみると、その飛沫は暗くて見えないが、水溜まりに落ちたのが反射で分かった。あの時あいつの顔に広がった波紋が鮮やかに蘇る。後でメールを送つとくか。

t w n o v e l

濡れた髪の毛にドライヤーを当てる。このムシャクシャも吹き飛ばしてはくれないか、なんて独り言が出そうになった。その時ふと、俺はその中身が気になった。しかし、温風が目当たって覗けない。

それでも無理やり瞼をこじ開けると、そこには逆風が見えた。なんだ、お前も敵か？ #twnovel

人目につかない所で、ガードレールが曲がっているのを見つけた。ちゃんと仕事しろよ、なんて言っただけで蹴ってやるうかとも思ったのだけれど、止めた。コイツはずっと誰にも気付かれずに放置されていたのだらう。それでも、こいつはまだ立っている。なら、俺も負けられないじゃねえか。 #twnovel

ケータイのアラームで目覚める朝。今日は目覚めが良くない、と駄々をこねていると、不意にアラームが止まった。どうやら充電が切れたらしい。もうすぐ出かけるのに、ついてない。しかも充電器が見当たらない。最悪だ。全身に力が入らない。ああ、俺の充電器は、一体何処にある？ #twnovel

「それじゃ、またどこかで会おうぜ」彼はそう言って電話を切った。こんな日も仕事に行くなんて彼らしいけれど、やっぱり悲しい。TVではカウントダウンが始まった。その時、画面の群衆の中にプラカードが。「また会えたかな？」本当に彼らしいや。 #twnovel #もし明日地球が滅亡するなら

スーパーは閉まっている。交番もガラ空きだ。車も疎らで、道路を

野良猫が闊歩している。そんな道沿いで僕はゴミを拾う。道行く人にその理由を尋ねられたら、こう答えるつもりだ。「一度やってみたかったですよ。だって僕、不良じゃないですか？」 #twn

ovel #もし明日地球が滅亡するなら

大学の講義室。先生の前に、生徒は一人。それは俺だ。やはりこの先生はやつてくれる。「では、先週出した課題を提出するように」それは「生きるとは何か」がテーマのレポートだ。もちろん、俺はレポート用紙に一行こう書いた。「人生を楽しむこと」 #twn

ovel #もし明日地球が滅亡するなら

私はよく、講義に行ってみたら休講だったり、図書館に本を返却しに行こうとしたら閉館日だったりする。でも今日は大丈夫。ちゃんと念入りに調べたんだ。あれ？ でも大学に誰もいないな。ん？ この張り紙は……？ 一体これは何のドッキリなの？ #twn

ovel #もし明日地球が滅亡するなら

受験勉強を放り投げて一週間が経った。一日中ゲームをしていても親は「あまり遅くまで起きてるんじゃないのよ。風邪ひいても病院開いてないんだから」としか言わない。時計はあと十分くらいで明日を迎える。何となく、俺は机に向かうことにした。 #twn

ovel #もし明日地球が滅亡するなら

今日のTLはいつもより速い。皆、どこかで残り時間を静かに過ごしているのだろう。そこで不意に流れてきたRTに目が留まった。
「#もし明日地球が滅亡しないなら」あつという間に、TLがこのタグで埋まっていく。何だか明日が来そうな予感がした。 #tw
novel #もし明日地球が滅亡するなら

彼は独り、考えていた。この部屋は直線に溢れている、と。天井は四角に切り取られ、窓は枠に押さえつけられている。だが、その外の自然はどうだ。樹の幹はうねり、光でさえ乱反射する。なら人生はどちらだろうか。その囚人はおもむろに立ち上がると、直線の鉄格子を曲げにかかった。 #tw
novel

夏なのに、朝起きると雪が積もっている。そんな夢をみた。それはまるで自分のひねくれた心の中に入ってしまったみたいだった。それはすぐに夢だと分かったけれど、そこから逃れる方法は無く、ただただ呆然と朝陽に溶けゆく雪を眺めていた。この夢が早く溶けるようにと願いながら。 #tw
novel

並んだ野菜の前で空っぽのカゴを提げながら、俺はただ立っていた。だってどれも活き活きとしているのだ。本当なら畑で輝く野菜たちが、ライトを浴びて無理に新鮮さをアピールしている。俺はもうたまらなくなつて、片っ端から野菜をカゴに入れることにした。 #tw
novel #とあるスーパーで

私はレジを打つ。打って、打って、打つ。そう、私はロボットだ。ただレジだけができるいいし、私にはそれしかできない。そんなある日、いつも見る客に初めて話しかけられた。「今日は暑いですね」「……そうですね」あれ？ 今日は何だかレジ打ちが、楽しい。

#townovel #とあるスーパーで

「今日は何にする？」「何でもいいや」「何でもいいのね？ それならナンだけにしておけようかしら」「分かったよ。じゃあカレー」「それは昨日食べたでしょ」「なら麻婆茄子」「よくっし。そうと決まったら早速ナスを……、あれ？ 野菜が全部無い！？」

#townovel #とあるスーパーで

節約のために、僕はいつものように安売り中のスーパーへ行った。ところが、である。いつも安売り商品が激戦なのは熟知しているが、なんと今日は既に野菜が完売状態。一体どんな戦闘があったというのだ。だから僕はレジの人にこう言った。「今日は熱いですね」

#townovel #とあるスーパーで

住宅街を男が駆けていた。その理由はこの雨ではない。脱獄犯だからだ。公園を見つけた彼は雨宿りしようとした。だが段ボールが邪魔で入れない。苛立った彼は蹴飛ばそうとして、止めた。中の子猫

と目が合ったのだ。その日、空に虹がかかる頃には彼も子猫も公園から姿を消していた。 # t w n o v e l

本の海。それが友人の部屋の第一印象だった。それでも全てを把握しているならまだいい。だが彼は、ただ自慢するためだけにハワード・カーターの著書を”本飛沫”を上げて探していた。そこで僕はあることに気付いた。「ねえ、さつきから足元にあるその本は？」
「ん？ あ、あつた！」 # t w n o v e l

第九卷 子狐の栞

書いた文字だけで、全てを表現できるだろうか。この世は文字で作られている訳ではないし、文字は人間が作った枠の中でしか動けない。それなのに、どんな妄想だろうが文字を羅列すれば思いは伝わるんだ、なんて信じているのなら、それこそ妄想ではないか。ねえ、君はどう思う？ #townovel

通り雨が降ってきた。そこで傘を忘れたことに気付いたが、もう遅い。道行く人々はパサリパサリと十人十色の傘を開いていく。まるで天が人間の傘の色を確かめているようだ。その時、通りすがりの人が俺を傘の中に入れた。「風邪引いちゃいますよ」その傘の色は今でも忘れない。 #townovel

人気のピエロは笑って言った。「僕には才能がないんです」確かに、彼は真剣に玉乗りをしても、必ず尻から落っこちるのだ。それで客は大爆笑。そんなある日、彼はついに、お粗末ながら玉乗りを成功させた。その時、客席から返ってきたのが拍手と涙であることは言うまでもないだろう。 #townovel

私は幽霊が見えてしまう。今朝も、出かけようとして玄関を開けると、そこに変な奴が立っていた。こういう時は気付かないふりが一番だ。目を合わせずに行こうとしたが、そこで私は服を掴まれた。

霊が物を掴めるはずがない。動揺する私に、そいつは声を荒げた。
「家賃3ヶ月分!!!!」 #twnovel

マウスの右クリックが反応しなくなった。もう潮時かと思い通販サイトでマウスを探していると、リンクをタブで開こうとして、うっかり右クリックしてしまった。もちろん開くはずがない。開かせたくないのだから。俺はクローズをクリックして、電器量販店へ向かうことにした。 #twnovel

川面に水紋が揺れている。同じような波が何度も岸边へ寄つていき、その度に岸边は濡れた。それは百年後も千年後も変わらない光景だ。しかしそれで何も変わらない訳ではない。岸边は少しずつ波に削られている。きつと百年後も千年後も、全く違う川の形を見ることができるはずなのだ。 #twnovel

「そっぴゃあ後藤は？」同窓会にいつが来ないはずはなかった。「お前知らないのか。あいつは、お星様になっちまったんだよ」「そんな……俺より先に行くなんて」「えっ?」「えっ?」友人が指さす先には、テレビに映る今話題の一発芸人の姿が。「ジョニー後藤のショートコント!」 #twnovel

苔むした石垣が続く山道を、誰かと過ごすべき休日歩いているの

は私くらいのもだった。蝉の歌が、ずっと頭の中を回っている。まるで、この道が終わらないような気がした。だがそれを遮るように、声がする。「あの、落とし物……」どうやら世界には、似た人間がいるらしい。 # t w n o v e l

そこには綺麗な押し花の栞が挟まっていた。きっと持ち主が気付かないで、この古本屋に売ってしまったのだろう。店主に話すと、その本を買うなら一緒にくれるとのことだった。その夜、居間でそれを眺めていると母が口を開いた。「あら、それ私の栞じゃない。勝手に使わないでよ」 # t w n o v e l

「なあ、俺たちこの本屋じゃ立ち読みできねえみたいだぜ」「ハア？ 何言ってるんだ。俺たちはいつでも読み放題だろ」「いや、あの張り紙を見てみるよ」「張り紙？……ウツ、恐ろしいねえ。一体、いつ気付かれたんだ？」その張り紙には、明朝体でこう書いてある。「立ち読み減菌」 # t w n o v e l

久しぶりに帰省した僕は、昔馴染みのちよつと変わった本屋の前を通りがかった。「大安売り」という看板と共に、「大安」さんの書いた本が並んでいる。変わらないな、と思いながら僕は店主に声をかけた。「お久しぶりです。僕が小説家の『大安真吾』だって、誰から聞いたんですか？」 # t w n o v e l

あの勉強熱心なクラス会長が、一人で漫画コーナーにいるのを見つけた。しかも周りの目を気にしている様子が、あからさまで微笑ましい。しかし、彼女はどんな漫画を読むのだろう。彼女が去った後にそこへ行った瞬間、俺は反射的に踵を返した。BLの二字が、そこにあるはずがない。 # t w n o v e l

ここでバイトを始めてから、本屋は人生の窓ではないかと思うようになった。ある時、児童書を大量に買っていく男がいた。きっと父親になったのだと思っていた。だがその一週間後、その男がレジに持ってきたのは「脳死は人の死か」という本だった。その本を受け取る手が、震えた。 # t w n o v e l

あの人はいつも学校帰りにこの本屋へやって来る。それが私の毎日の楽しみだった。いつもは奥の文芸コーナーに行ってしまう彼だったが、なんと今日はこっちへ来る。私は内心大喜びしたが、それも束の間。彼の手提げの中に電子辞書が見えた。ああ、紙なんか生まれなければ良かった！ # t w n o v e l

この本屋には奇妙な店員がいる。いつもレジで本を受け取るたびに手を震わせるのだ。ある日、その店員に声をかけてみた。「本が怖いんですか？」「ええ、バレてましたか。以前は本を読むが好きだったんですが、それに値段をつけて売るようになってからは何だか本に申し訳なくってね」 # t w n o v e l

私には神様が見える。それは、本の神様だ。本屋の店員をしていると、私にお話を聞かせてくれる神様もいれば、もっと大切に扱ってくれれば早く出ていけたのに、と罵って買われていく神様もいる。そんな出会いと別れは辛いけれど、だからこそ私はこの仕事を続けられるのかもしれない。

t w n o v e l

見知らぬ町の本屋に行くのが僕の趣味だ。今日訪れた本屋には、何とも珍しい黒表紙の本があった。それは開くことが出来ず、中身を知る由はない。「これは何の本なんですか？」すると店主は言う。「それは人生だ。開いてみなきや中身は分からん。でも君には、分かるんじゃないかい？」

t w n o v e l

この部屋の中にも頭には何も浮かばない。逆さまになってやれば新しい顔でも見せるのかとも思ったが、自分はこの部屋で寝起きしている訳で。詰まるどころ、インドアというのは同じフィギュアを角度を変えて眺めて楽しんでるのに過ぎないのだろう。このついのべも、また然りか。

t w n o v e l

ありふれた言葉も
良心を付け忘れた文章も
頑張ってツイートすれば

届くところには届くんだなんて

嘘だと思っていた自分が恥ずかしい

#townovel #ありがとう

それにしても悪いことをしてしまった。昨日山に入ったら、目の前で子狐が倒れて苦しんでいたんだ。つい悪戯をしたくなって、薬だと言ってドロップをやると、子狐はそれを大事そうに抱えて、元気に跳ねていつちまいやがった。恐らくは母狐の病気が何かで薬が欲しかったんだろうさ。 #townovel

第十卷 星々の駅

振り返る。誰もいない。そんなはずはない。一体何処に消えたというのだろう。ほんの数秒の出来事である。そもそも彼らが俺の後ろからいなくなるなんて、ルール上ありえない話だ。拭えぬ不安を隅に置いて、俺は仕方なく次のフェイズに移ることにした。「だるまさんが、ころんだ」 # t w n o v e l

「なあ、あれって動いてるんだよな」隣にいる友人は、夜空を埋め尽くす星々を指さして言った。「星が動いて見えるのは地球が回っているからだよ。学校で習ったろ」でもそれで納得していないようだ。「いや、動いてるよ。揺れ動いてる。自分が他の星より劣ってるんじゃないかって」 # t w n o v e l

「毎日必ず新聞紙を買っていく大学生がいるんだけどね、それがとても不思議でさ、選ぶ新聞がいつも違うんだ」「それなら、明日その客が来たときに『羊と馬ならどっちが好きですか？』って聞いてみなよ」さて翌日。それを聞いた客はこう言った。「私は馬毛の筆の方が好きですね」 # t w n o v e l

「金を出せ！」夜のコンビニに目出し帽を被った男が来店した。怯えるアルバイト。俺の他に客はいない。普段ならこんなことをする人間じゃないが仕方がない。そつと背後から近付き、力を込めて殴

ってやった。「お前のせいで、俺たちが強盗に入れなくなっちまったじゃねえか!!」 #tnovel

妹の誕生日プレゼントをかうのを手伝って欲しい、と言う友人とコンビニへ行った。すると何を思ったか、彼はカゴに次々とアイスを入れた。 「買い過ぎじゃないか？」 「当たりのアイスをあげるのさ」 「でもどれが当たりか分かるのかよ」 「当たりの棒で、またアイスを作るんだよ」 #townovel

「『コンビニ』って何の略か知ってるか？」「コンビニンス……？」
「違うよ。『こん』にちわ、いらっしやいませ。『ビニ』ー
ル袋はご利用ですか？」の略さ」その二人がレジへ行くと、店員は
わざとらしく言った。「ようこそ、いらっしやいませ。当店は袋が
有料となっております」 # t w n o v e l

大きな熊に出会ってしまった。「食ってやる!」「待て。俺を食うより賢いやり方があるぜ」「どうするんだ?」「俺の服をやるから、それを着て村へ行くんだ。誰もお前を熊とは思わんぞ」「それは良い」シメシメと思うっていると、熊の中から一人の男が。「この着ぐるみも飽きてたんだ」 #twnovel

「君は猟師かい？」村の長老らしき人物が、俺に声をかけてきた。

「一応は」「実は最近この村に奇妙な熊が現れてな」「奇妙、と言うと?」「人も犬も襲わなくせに、金やら宝石やらを盗っていくんじゃない」「ああ、それならもう大丈夫でしょう」「あなたの真珠は高く売れましたよ。 #twnovel

「時間をください」俺の前にレジに並んでいた男は、商品も持たずにそう言った。「かしこまりました」店員もすました顔で答える。「どのくらいお買い上げになりますか?」「あるだけお願いします」一体この店は何なんだ。すると男は懷から何かを取り出した。それは綺麗な指輪だった。 #twnovel

「ロゼッタストーンってどこにあるの?」「大英博物館だよ」「じゃあ、そこには前のホークスの選手のユニフォームとかも飾ってあるのかな」「ソフトバンク博物館ならすぐに建っちゃいそうだけだな」 #twnovel #twnvday

「【ロ】ゼッタストーンなんてお題さ、Wikiでも見なきゃ【ゼッタ】イ書けねえっての。でもWiki見ると【ス】グ書ける代わりにネタ元が透けて見えるだろ? だったら【トーン】ダウンしたっていいから、最初から知ってる範囲で書いたって良いと思わねえ?」 #twnovel #twnvday

信じられないだろうけど、さつき河童が川で溺れていたんだ。河童なんている訳がないし、そもそも溺れる妖怪じゃないだろ？ でも仕方がないから手を差し伸べたんだ。すると何て言ったと思う？ 「助けるなんてヒドイ人間だ」 って言うんだぜ？ だから言っちゃったさ。「俺は死神だ」 #townovel

都会の大学に通うことになった。一人暮らしだ。私は駅のホームで、未来圏に吹く自由な風を妄想していた。しかし重い荷物が肩に食い込んで痛い。まるで地元に縛りつけようとする呪縛のようだ。私は最初それを払おうとしたが、思い直した。これはきっと、自分に乘せられた思いなのだ。 #townovel

ドアを開く。人を吐き出す。人を飲み込む。ドアを閉じる。まるで工場の生産ラインのようだ。いや、とつくに電車は人を支配しているのだ。電車が無ければ社会は停止してしまう。なぜ人は自分の足で歩こうとしないのだろうな。その鳩は、飛び方を教えるように駅のホームを後にした。 #townovel

何年前のことだろうか。思い出すのは辛いからしない。この駅の改札が彼女との最後の別れの場所だ。しかしここに帰ってくれば、という期待は儚いものだった。まさか廃線になっていたとは。そこでふと、置いてある花瓶に気がついた。活き活きとしたラベンダーの花が、そこにあった。 #townovel

まさかこんなことになっていようとは。そこはまさしく近代的な駅だった。しかも改札はカードをかざす方式。なぜか飛び降り防止の柵である。しかしカードは向こうに忘れたし、お金も無い。どうしようか？ 「それでは三途の川線、『こつち』駅発『あつち』駅行き、発車致しまゝす」 # t w n o v e l

駅で、子供が大人切符を買おうとしているのを見た。変なお兄さんにされたくはなかったが、買う前に教えたほうが良い。「それ、大人切符だよ」「いいんだよ、これで」バカにするような言い方が癪に障ったが、その子の行く先を見て納得した。お婆さんが、その子にお礼を言っていた。 # t w n o v e l

「なぜ自分は駅に来たのだろう」それに内なる答えが返ってくる。「部活の遠征だからさ」「でも自分は補欠じゃないか。行つたって意味が無い」それに答えは出てこない。その時、誰かの会話が耳に入った。「やっぱ無人駅って嫌だよな」「だね。誰かが一人いるだけでも違つのに」 # t w n o v e l

駅のホームの向こう側。月明かりに照らされて、孤独なベンチが佇んでいる。それをずっと眺めていると、神秘的なオーラに包まれているようで心地いい。しかしふと気付くと、何とあと一步でホームから落ちる所だった。はっとして視線を戻すと、そこには月明かり

だけが残されていた。

t w n o v e l

私の父は「駅は人生だ」と言うのが口癖だ。でも私は駅が嫌い。あの混線するような人混みが嫌なのだ。そんなある日、私は落とした切符を見知らぬ人に拾ってもらった。その人とは偶然同じ大学で話が弾んだが、それ以来会っていない。今、私は父の口癖の意味が分かった気がしている。

t w n o v e l

第十一巻 空色の梯子

「新着メール1通」画面に表示が出る。それは久しく音沙汰の無い旧友からの、同窓会を知らせるメールだった。”どんな文面にしたものか”そこで検索窓に「メール 旧友 書き方」と打ち、文章例を探そうとした。ところが画面にはこんな表示が。「それは自分の言葉で書きましょう」 #townovel

A「酒は良いねえ！ 神様からの贈り物だよ」 B「またこんな昼間からお酒飲んじやつて。アル中なんじゃない？」 A「うるせえ。お前だつて中毒じゃねえか！」 B「そんなハズないつて」 A「いや。お前、24時間ツイートしつ放しだろ！」 B「……（；・・）」
C「www RT」 #townovel

「お疲れ様です」「お疲れ」後輩達が仕事から帰って来た。「でも、まさかこんなに忙しいとはね。この仕事さ」ふと一人が発したその未熟な言葉を、先輩として見過ごす訳にはいかない。「クリスマス以外の日には夢を配る。それが本当の仕事さ。夢がなきゃ、希望も持てないからね」 #townovel

空色の傘が、風に煽られて早朝の雨空に舞い上がった。それが誰の傘なのかは知らない。なぜ風がそれを舞い上げたのかも知らない。けれど小さな青空が生まれたのを見つけた数人は、その話を会社や

学校でするだろう。そうしてできる青空の断片がつながって、きつと青空は生まれるのだ。 # t w n o v e l

建物の解体現場に遭遇した。それは古いコンクリのアパートだったが、今はすっかり瓦礫の山だ。あんな大きな建物を周囲の建物を傷つけること無く壊すその技術は羨ましい。私も巧い壊し方を身につけたいものだ。だがそれにはまず、巧い作り方を身につけなければならぬのだらうな。 # t w n o v e l

狸はムンムンと考えていた。あの畑の西瓜が食べたいのだが、そこに番犬がいるのである。でもそこは狸。鳥に化ければいい。笑って化けた狸だったが、すぐに頭を抱えてしまった。翼をばたつかせても、飛ぶ気配がないのだ。そりゃあ当然。鳥だって最初から飛べる訳ではないのだから。 # t w n o v e l

亀は考えていた。もう首を出してもいいだろうか、と。ぼーっとしていたら人に囲まれてしまっていたのだ。首を引っ込めてやり過ごしていたが、そろそろ飽きて帰っただろう。亀は慎重に首を出したが、なんと目の前に人がいた。「再び出すまで14分か。よし、良いデータになるぞ！」 # t w n o v e l

あのシェフの困り顔は気の毒だった。あるホテルのシェフになる審

査会を視察に行った時の話だ。審査員が笑顔を見せれば採用となるのだが、ずっと無表情で「おいしい」と言うだけ。「素晴らしいですね、あの動くマネキン」。「無反応に耐えられるシェフが、今は必要ですからね」 #townovel

「空の段ボール箱です。ご自由にお持ちください」そう書いてあったから、俺はそれを一つ持って帰った。荷物整理に使おうと思ったのだ。しかし、帰ってから開けてみて驚いた。その中に雲が見えたのだ。そう、このダンボール箱は「から」なんかじゃない。「そら」が入っていたのだ。 #townovel

「そうか、手紙だ」彼はそう呟くと、おもむろに腰を上げてペンを手にした。「ご主人様、メールになさればいいのでは？」「それでは駄目だ。私は心の交流がしたいのだ。貴様のようなロボットと会話しているのは飽きたんだ」「しかし、もう人類はご主人様しかいらっやいませんか？」 #townovel

「地球上の生命は神に逆らってエントロピーを減少させた。だから全ての生命は世界から抹殺されねばならない！」狂ったように叫ぶハイジャック犯。だがそれに異議を唱える乗客がいた。「いや、違うな」「なぜだ？」「人の感情が、こうやってエントロピーを増大させているじゃないか」 #townovel

彼は誰かの役に立ちたかった。でもなれなかった。だから彼は生まれ変わったら誰かの役に立ちたいと願ったのだ。そして今、彼の生まれ変わった命さえも奪われようとしている。それでも彼は笑っていた。「これでようやく誰かの役に立てるんだ」そうして一匹の実験動物は役目を終えた。 # t w n o v e l

「これはベストセラーを書けるペンなんだよ」それが私の友人であり、ライバルであり、時代に愛された作家と交わした最後の会話だった。今それは形見として私の手元にある。確かに本はよく売れるようになった。「我が友の知られざる過去」そんな本しか書けなくなってしまったが。 # t w n o v e l

「いい子にしないとサンタさん来ないわよ」「ええー！？でもサンタさんはどこから見てるのさ？こんな家の中まで分かるはずないじゃん！」「この子、鋭いな」「バレてないですよね？」「当たり前だ。まさかクリスマスツリーが盗聴のためのダミーだなんて誰も思わんだろ」 # t w n o v e l

「博士！ロボットが完成したんですか？」「そうじゃ」「まさかとは思いますが、電源はコンセントじゃないですよね？」「もちろん。単三電池で動けるぞ」「電池？……、持続時間は？」「なんと365日！」「おお、スゴイ！」「ただし電池365本を運んでくれる人間が必要じゃ」 # t w n o v e l

「何かの研究ですか？」その男は樹に登ってカウンターをカチカチとやっていた。「葉っぱの数を数える研究だよ。でも、もう終わりさ」「何枚だったんですか？」「ちょうど200枚」しかし、そうは見えない。「僕はね、何枚数えた時点で声をかけてもらえるかを実験していたんだ」 # t w n o v e l

ついに夢が叶った。タイムマシンの完成だ。早速ダイヤルを未来へ回す。人類の将来はどうなっているのだろうか？そして着いたのは、意外にも一面の花畑。暗い未来など何処にもなかったのだ。しかし、どうも花の様子がおかしい。花部は人の顔に似ていて、葉は手、根元は脚のように……。 # t w n o v e l

今日は森の動物達の障害物レース。川を越え、谷を渡り、最後に待ち構えていたのは二股の道でした。あっちか、こっちか。どちらかがゴールに近いのですがビリのカメは気付いたのです。「なんだ、真っすぐ行けば近いじゃないか」誰が勝ったかって？そりゃあ、お決まりの結末ですよ。 # t w n o v e l

「何をやっているんだい？」「埋蔵金を掘っているんです」「ここにあるの？」「いえ。でもこの地域にあるそうですよ」「ダメだなあ、君。こういうのは見当をつけてやらないと。でないとそれが君

の墓穴になってしまふよ」そう言つて古地図を振つていた彼も、やはりダメだったそうだ。 # t w n o v e l

そのリスは木登りが苦手だったが、美味いと噂の木の実がどうしても食べたかった。そこでリスは梯子を作ろうと考えた。でも出来るのは不恰好なものばかり。それでも試行錯誤を重ね、ついに美術品くらい立派な梯子が完成した。早速リスが足をかけると、次の瞬間パキリという音が……。 # t w n o v e l

第十二巻 糸電話の妖精

ある国の遠征軍が未知の国へ踏み入れた。「將軍。この国の住人は考えることを知らぬようです。まるで機械のように動きます」「それなら奴隷にしよう。良い使用人になるぞ」「いえ。それは無理でしょう」「なぜだ?」「他人の猿真似しかできないのです」結局、征服は後回しとなった。

t w n o v e l

ドーナツが転がっていた。それも1個や2個の騒ぎではない。100、いや10000の単位で山の斜面を流れていた。それに気付いた街の人々は歓喜の声を上げながら走っていつてしまった。だがあれは悪魔の悪戯だ。今頃彼らは気付くはずである。そのドーナツがあまりにも巨大なことに。

t w n o v e l

やっと見つけた。小さな花の上にちょこんと座っている。そう、妖精だ。妖精が振りまく光る粉は長寿の薬。それを僕は病弱な妹のために持つて帰らねばならない。僕は虫取り網を構えた。だが気付かれていたらしい。ふと見遣ると網の中に小瓶がある。それは僕にはひとときわ輝いて見えた。

t w n o v e l

「君がバイトの子かい? さ、こちらに」おじさんに促されて向かったのは小高い丘の上だった。「これが仕事場さ」そこには発掘されて姿を現した遺跡の姿が。思わず息を呑む。「感動するだろ?」

何も無い所に魂が眠ってるみたいで」「いえ。むしろ生の中にある死に、心が震えました」 # t w n o v e l

実は、雲の上には小人が棲んでいる。彼らは体重が軽いから、雲の上で生活できるのだ。しかし近年飛行機が問題になっている。住処を荒らされないように、隠れなければならないのだ。だが悪いことばかりでもない。離れ離れになった雲の間に、飛行機雲が架け橋となってくれるからだ。 # t w n o v e l

僕は呪われているに違いない。おとといは授業中に鉛筆を折り、昨日は体育で脚の骨を折ってしまった。一体どれだけ折れば気が済むのだろう。そんな風に落ち込んで心も折れかかっていた、そんな時病室をノックする音がした。「お見舞いだよ」。クラスのみんなで千羽鶴折ったんだ！」 # t w n o v e l

写真は一枚の中に集約された情景が心を動かす。それが私は好きだった。そんな今日は散歩中に見つけた猫にズームする。こつちを向いて、それとなく警戒心を漂わせている姿。これが良い。そう思った時だった。「ニヤア」その何かを悟ったような声が忘れられず、今もカメラを握れない。 # t w n o v e l

首相が盗まれて一週間が経った。討論番組でもその話をやっている。

「そもそも首相をスーパーコンピューターにすることが間違ってたんだ」「いや、それは別に良いじゃないですか。だって実際、景気は良いし政治混乱もない。それより問題は総理のクラウド化を渋った国会にあると……」 # t w n o v e l

その知り合いはヘッドホンを耳につけていた。「何を聴いてたの?」「何も聴いてないよ」「???……耳当ての代わりとか?」「いや、違うって」「分かった! 耳栓の代わりか」「そうじゃない」「じゃあ何でつけてたの?」「だから『何も聴いてないよ』っていう曲を聴いてたんだよ」 # t w n o v e l

「『すれ違い通信』って知ってる?」「知ってるよ。俺は持ってないけど」「え、結構持つてる人いるの?」「クラスでも10人以上はいるよ」「それヤバくない?」「いや、普通でしょ。ていうか何か誤解してない?」「『すれ違い通信』って、うちの担任のブログの名前なんだけど……」 # t w n o v e l

糸電話が降ってきた。見れば糸はすうつと天まで伸びている。一旦は躊躇したが、好奇心が疼く。「もしもし」こもった声が振動になる。すぐに返事がきた。「もしもし」それからしばらく、時間を忘れるような一時を過ごした。「ところでお名前は?」「私は時間泥棒と申します」 # t w n o v e l

もしスプーンがこの世から無くなったら、カレーはどうやって食べようか。インドでは手で食べる。でも日本の宗教観ではない。やはりレンゲか。だがあれはスプーンがルーツだから反則だろう。とにかく、今言すべきはただ一つ。「スプーン取ってくるの忘れちゃったから、先に食べてて」 # t w n o v e l

「今日もいい朝ですね」カーテンを開けた向こうで咲いている野花に話しかけてみる。その花は何も喋らない。「今日も空気がおいしいですね」自転車で走りながら、青空を流れる雲に投げかける。その雲は何も喋らない。それでいい。僕が待っているのは、これから会う友の声なのだから。 # t w n o v e l

体が浮いた。風船のように、風に足を取られながら。とにかく地上へ戻らなければ。もがく。だが手応えはない。もうダメだ。「元に戻してくれ」「それはできません。望みを叶えるのは一回だけです。から。それにしても、こんな辛い思いをしている風船に、どうしてなりたがるのですか？」 # t w n o v e l

あと少しリードを守って、この長い坂を登りきればいい。その時だ。坂の上から何かが転がっていった。一瞬迷ったが、先に体が動いてしまう。向きを変え、急いで坂を降りた。転がるそれを拾った時には、もう諦めていた。だが掴んだ物を見て驚いた。「マラソン式入社試験 内定通知」 # t w n o v e l

ついに、感情に合わせて自動で声に色がつくようになった。嘘をついても信用を無くすだけの、誰もが素直になれる時代が到来したのだ。「ちよつと、その兄ちゃん。安くしとくよ！」その声に嘘の色は無い。「声の色を偽装できるアプリだ。欲しいだろ？」「……お高いんですね？」 # t w n o v e l

何年かぶりに母校へ来た。こんな放浪の写真家にも帰巢本能はあるのだと感心する。ふと校庭から教室を見上げると、居眠りしている生徒がいた。思わずカメラを向けると、そこに見えたのは何故か自分だった。ああ、思い出した。俺は写真家になることを親に反対されて、あの窓から……。 # t w n o v e l

窓から紙飛行機を飛ばす、のなら分かる。だがてるてる坊主は聞いたことがない。でもジャックされた放送室の窓から、それが次々に飛ばされていた。「明日の文化祭は絶対晴れ！ 全員野外ステージで私の歌を聴きなさい！」そのステージが、てるてる坊主で埋まっているとも知らずに。 # t w n o v e l

ふとした出来事で植物は歩くようになった。根を脚にして、のっそり陽の当たる場所へ移動するのだ。こうなると背が小さいと不利そうだが、実はそうでもない。大きい樹の上に登ればいいのだ。やが

てそこから滑空することを覚え、植物は空にも進出するだろう。この世に、不可能はない。 # t w n o v e l

困った。シャープペンの芯が無くなってしまったのだ。いや、正確には中に吸い込まれているようである。そこで中を見てみると、奥の方に黒い塊が詰まっていた。「ブラックホールだ」それに気付いた瞬間、俺は吸い込まれて目が覚めた。芯が無くなって諦めた問題は、なぜか消えていた。 # t w n o v e l

第十三巻 放課後の猫

それは知人の論文原稿を読んでいる時だった。突如、文字が一斉に動き出した。まるで紙の上を這い回る虫のように。もう論文が読めなくなったことは、どうでもいい。早速この現象を書き留めなければ。だがその殴り書きさえも、すぐに走り出してしまふ。これは一体……？ #twnovel #文字の反乱

仕事が無くなつて一週間が経った。仕事が来なくなつたのではない。できなくなつたのだ。機械の故障だとか、天候不順だとかは無い仕事のはず、だつたのだが。「事實は小説よりも奇なり」原稿用紙に書いたその字が目の前で踊りだすのを、ただ眺めるしかできなかった。 #twnovel #文字の反乱

「もう駄目だ！」相棒が匙を投げかける。「落ち着け」「でも流石に無理だよ」爆弾の解体は、あと暗証番号を入れるだけだつたのだが、それをメモした数字が突然バラバラになつてしまつたのだ。でも俺たちは運が良かった。「おい、見てみる！ 残り時間の数字も……」 #twnovel #文字の反乱

「お爺ちゃん。この骨董品は何？」「それはパソコンっていう、昔の機械さ」「まだ動く？」「ハハハ、動かんよ」「なんで捨てないの？」「壊れてはないんだ。プログラミング言語というのがダメで

ねえ。無事に動いてくれば、久しぶりに婆さんの顔を見れるんだが……」 # t w n o v e l # 文字の反乱

「ドードーって鳥がいただろ？ 進化して飛べるようになった鳥が、進化して飛べなくなつた。あれと同じさ」「それは退化だ」「じゃあ海へ帰つたクジラは退化か？ 違つたろ？ で、ヒトは文字を無くした。これも意思伝達の変化への見事な適応だよ。これは必然なのさ」 # t w n o v e l # 文字の反乱

旅は良い。道中で出会つた人に声をかけ、道を教えてもらつ。まるで素朴な野花を見かけたような、そんな嬉しさがある。昔、文字が使えた頃は地図で道が分かつたそうだが、その時代の人々は本当に旅を楽しんでいたのだろうか。次に出会つた人とはそんな話をしてみよう。 # t w n o v e l # 文字の反乱

「私の頃は良かったなあ。友達が頭の良い奴のノートを書いたのを写してテストに持ち込んだよ。それも前日に借りてさ」「先生、ノートって何ですか？」「そうか、今の子は知らないか。先生が黒板に書いたりしたことを書き写すための紙だよ」「黒板って何ですか？」 # t w n o v e l # 文字の反乱

目が覚めた途端、頭の中に記憶が蘇つた。夢の中で私は小説を読ん

でいた。面倒臭がりな探偵とドジな助手のコンビが活躍する、最高のミステリーだ。まだ文章は目に焼き付いている。これは書き留めなければ。だがそこで気付いた。もう文字を書いても意味を成さないのだ。 #townovel #文字の反乱

前を歩く子供達はサンタの話をしている。だが、その中に暗い顔があるのに気付いた。「サンタさんには何を願うする?」「うん、お願いなんかない」「何で?」「僕ん家は貧乏だからサンタさん来ないって」「じゃあその日はお泊り会しようぜ! 俺ん家なら来るはずだもん!」 #townovel

「もうダメだ。さよなら」そんなメールが突然来た。驚きが焦りで消える。考えろ、自分。時間に脅されるようにキーを打った。「Don't be evil」幸いにして返信がある。「悪になるな、ってどういう意味?」「evilの逆だってことさ」するとすぐに返事が来た。「バカ」 #townovel

「テトラポッドってどう思う?」それにすぐ答えられるのは、造っている人くらいだ。「奴らは4本の腕で波を受けるだろ? でも受け切れない。なら2本腕の人間には到底ムリだと思う訳さ」「人は無力ってか?」「いや。奴らを見習え。集まるんだ」「男二人で海に来てる奴が言うなよ」 #townovel

寒い、寒い。しかし今は手袋をはめている時間も無い。バスが出発してしまう。マフラーの巻加減は妥協してしまったから、隙間風が首に刺さる、刺さる。でも間に合った。走ったせいか、バスの空気は暖かい。だが腕時計を見遣り、思い直した。「運転手さん、ありがとうございます」 # t w n o v e l

放課後の、誰もいない音楽室。ピアノが哀しい旋律を奏でている。俺は廊下に立つて、その音色に聞き蕩れるのが日課だった。でもそれも今日で終わり。卒業というやつだ。だから最後にちよつとだけ悪戯をした。最後に叩かれる鍵盤が動かないように。その曲が終わってしまわないように。 # t w n o v e l

その猫はいつも同じ場所にいる。でも毎日会う割に、目が合うとすぐに逃げ出しやがるのだ。面白い奴である。だがある日、近づいてもそいつは動かなかった。これは、と思ったが次の瞬間、近くに植木鉢が落ちてきた。いつも通り歩いていたら直撃だ。ふと見ると、奴はもういなかった。 # t w n o v e l

三枚目を演じることに後悔はない。海の底に宮殿があったと法螺を吹いておき、開けた贈り物から噴き出す煙に紛れて翁と入れ替わる。それで伝説を作れば、村は観光地になれるのだ。だが、その事実を隠すために若者役の俺は隔離されることになっている。「浦島」という名の孤島の中に。 # t w n o v e l

ビルの隙間の路地に怪我をした小鳥が眠っていた。ちょうどいい。男は小鳥を拾い上げた。「あなたは命の恩人です」「勘違いするな。お前は食料さ」「あなたにそんなことができるはずがない」「ホームレスは無視して食ったが、それは間違いだった。「この体は寄生するのにちょうどいい」 # t w n o v e l

おかしな話だが天使の翼が一枚、片側だけ落ちていた。それだけなら知らぬふりをしてよかったが、それをめぐって二人の天使が喧嘩をしていた。どちらも片方の翼が無い。「二人で手をつないで飛べばいいじゃないか」「お前バカだろ。どっちも同じ側が無いんだよ」バカで悪かったな。 # t w n o v e l

その美しい姫君は舞踏会から霞のように消え去ってしまった。そして残されたのがこの鍵。そこで王様は鍵に合う鍵穴を探すように命令した。やがて発見の知らせがあり王様は喜んだ。だがそれを見て愕然とした。それはかつて王位継承の際に王様が謀殺した、幼かった従妹の棺だったのだ。 # t w n o v e l

バナナの皮を階段にポイ捨てしてみた。そこから始まる男女の恋を観察して、小説にしようという試みだ。モテた経験のない自分が情けない。「階段にゴミを捨てたらダメじゃない」これはチャンス。

「それを投げつけてから言ってくれた方が良い描写になるなあ。最初からやり直し！」 #townovel

エレベーターの中には自分独り。壁に寄りかかると、肌に金属の冷たさが伝わってくる。今日一日の疲れと入れ替わっていくようだ。こうやってエレベーターはみんなの疲れを吸い取ってくれているのかもしれない。疲れを力に変えて、どこまでも昇っていくんだ。もうすぐ、扉が開く。 #townovel

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2012r/>

あしざわTwitter小説集

2011年11月23日15時54分発行